

弥生時代のムラ

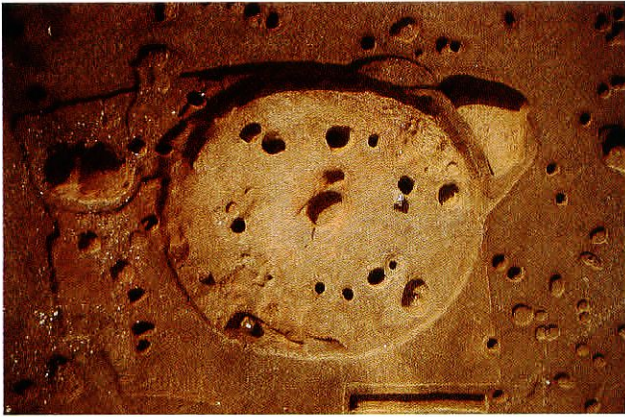
鳥栖市教育委員会



丘陵上の環濠集落（平原遺跡；東から）

弥生時代は紀元前3世紀から紀元3世紀頃までの約600年の期間で、稲作を中心とした農耕文化をもった人々が大陸から朝鮮半島を経由して渡来し、日本列島の人々がそれを受け入れ、習い発展させた時代です。金属器なども使われ始めます。鳥栖市域ではこの時代の遺跡が数多く分布しますが、その大部分は丘陵部に立地しています。最近の調査では、現市街地の元古賀遺跡（古賀町）、京町遺跡（京町）、藤木遺跡（藤木町）においても、大規模な集落が展開していることがわかりました。

弥生時代前期（約2200年前）には、八ツ並金丸遺跡や、今町岸田遺跡・平原遺跡などで集落跡がみられるぐらいですが、中期（約2100～1900年前）になると、遺跡群全域に分布し、規模も大きくなっていきます。なかでも一部が国史跡に指定されている安永田遺跡や大規模な首長クラスの人たちが葬られた墓が確認された柚比本村遺跡、環濠集落が見つかった平原遺跡などは北部九州の弥生社会を知る上で重要な遺跡です。これらの集落からは多数の青銅器の鋳型が出土しており、当時の最先端の技術を持った人々がいたことがわかります。また大久保遺跡・安永田遺跡・柚比梅坂遺跡という大規模な甕棺墓地の存在も調査で明らかになりました。後期（約1800年前）になると集落の数・規模ともに急激に少なくなり、牛原前田遺跡（牛原町）・内精遺跡（蔵上町）など、柚比遺跡群より南の低い丘陵に分布するようになります。



弥生時代前期の住居跡（平原遺跡）

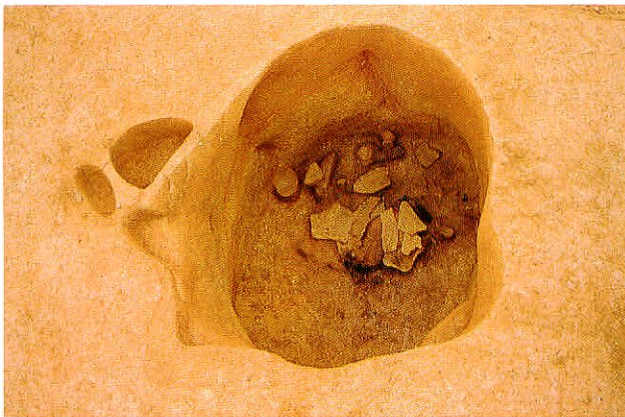
弥生時代前半期の住居は丸い形で、4本の柱で屋根を支える構造が典型です。袖比遺跡群では、平原遺跡・今町岸田遺跡などで確認されていますが、この時代の住居跡は、あまり見つかっていません。

住居跡の形は、時代が新しくなるにつれて次第に円形から方形となり、やがて長方形に変化する傾向にあるようです。



弥生時代後期の住居跡（平原遺跡）

後半期の住居跡は長方形の形をしています。大部分が2本の柱で屋根を支える構造です。また住居内に「ベット状遺構」と呼ばれる一段高くなった床を持つものもあり、弥生時代前半期の住居跡とは明らかに違う構造となっています。



貯蔵のための穴ぐら（今町岸田遺跡）

弥生時代前期から中期初頭にかけて食料などを地下に保管しておく施設がありました。これらは「袋状貯蔵穴」と呼ばれています。今町岸田遺跡では、約20基ほどが確認されています。これらは、フラスコのように入り口が狭く、地下で広がる形が特徴的です。これら貯蔵穴は時代とともに無くなり、変わって高床式倉庫へと姿をかえていきます。



集落への入り口（平原遺跡）

集落をまもるため、またほかの地区との境界の意味で濠がめぐらされています（環濠）が、平原遺跡からも、環濠が一条確認されています。そのなかに環濠の内と外をつなぐ橋（陸橋部）があります。入口には木で作った鳥が立てられていたようです。

この橋を通過して、弥生の人々が行き来していたものとおもわれます。